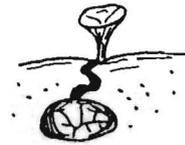
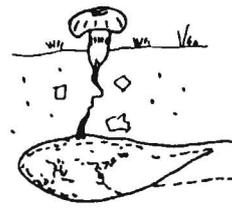
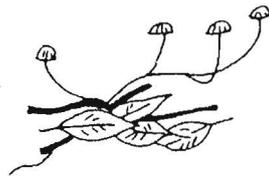


きのここと気象



1. 舞って遊ぶか？ マイタケ

今年の暑い盛り異常気象が叫ばれている中、小谷村のある人は、「今年のように暑くて雨の少ない夏は、山のマイタケはどっさり採れる。」と長年の経験から予想したそうです。その言葉を聞いていたのかどうか、当所のマイタケ（コナラ短木殺菌原木使用）は、昨年よりも約2週間早く昨年以上の発生量で続々と顔を出し始めました。

図-1, 2, 表を参考にみると、地温で20°C、気温で16°C位に下がった頃から2週間後がマイタケの出始める時のようです。きのこの芽（原基）がどのような条件下で成長し始めるかという大きな問題点がありますが（室内の菌床栽培では20°Cでも原基はできるようです）。

今年の場合、発生時期が昨年より早まったのは9月7日の雨による地温・気温の低下が刺激になったようです。発生量が多いのは、夏の高温が菌糸成長にプラスに働いたためでしょうか。その他にも多くの要因が存在していると思われるのですが、これらの気象条件の占める割合は大きいと考えられます。

2. アカマツ・松ぼっくりにも出るクリタケ

昨年秋、諏訪市湖南と塩尻市片丘の栽培地で気象観測を行ない、クリタケ（早生・中生）の発生状況を比較調査しました。図-1, 3に示すように、両所ともに気温16°Cに下ってから2週間位、

当所の地温では18°Cに下ってから2週間位で早生品種が出始め、中生品種は気温9°C、地温15°Cに下ってから2週間位で出始めました。

今年の場合、図-2に示すとおり気温・地温とも高めに推移しており、マツタケの発生を心配する声もありますが、昨年と同様に諏訪と塩尻でクリタケは温度に敏感に反応してくれるのでしょうか。

3. シイタケと気象

最近のシイタケ栽培は異常気象に左右されない技術の開発・普及のため、特に生シイタケの生産量は以前ほど気象の影響を受けなくなりました。様々な技術が進んだといっても乾シイタケ栽培における春子の生産は、それでもやはり毎年2~4月の気象に大きく左右され生産者は一喜一憂します。今年の春は高温・多雨の異常気象のおかげで、例年低温・乾燥風に悩まされる当所の天然ほだ場は、低温系から高温系の品種までほとんど区別なくシイタケが発生し、連日乾燥機が稼働し大変忙しい思いをしました。

前年の9月頃に原基ができていないと春子は出ない—と理屈では言われますが、9月に発生処理をした原木から続々とシイタケが発生するのを見ると、やはりきのこに関するメカニズムはそんなに単純なものではないようです。

表 マイタケ殺菌原木栽培試験（供試本数 30本）

年	収穫時期	発生量(g)	1株平均値(g)
1988(1年目)	9/20-28	5,617	255/41~645
1989(2年目)	10/2-12	4,965	292/160~392
1990(3年目)	9/21-	5,840	324/190~620

4. むすび

秋深し隣はマツタケ土瓶蒸し?! 秋と言えば、やはり話題はマツタケ。高価なためマツタケについては各地で多くの人が研究を重ねていますが、その他のおいしい野生きのこについてはまだまだ目が向けられていません。評論家H氏の詳細な調査記録によれば、干ばつの年も長雨の年も、高温の年も低温の年も、裏山のムラサキシメジは7~8カ所のシロから1日もずれることなく決して10月20日に初めて出るそうです。ムラサキシメジの菌は体内に暦を持っているようだ—とっています。

きのこ相の遷移、木材腐朽菌と菌根菌の違いな

どについても考えなければなりません、今までのところ当所の林では、クサハツ、ウスキモリノカサ、モリノカレバタケなどは昨年と同じ時期に始めているようで、ドクベニタケ、キツネタケ、ニガクリタケは昨年よりも遅いようです。

今回は、昨年と今年のデータから大胆な推測を試みましたが、これを機に様々な人が色々な所で鋭い分析力を持って、きのこの生態観察・自然観察をされんことを期待します。そして、願わくばその人達の思いどおりに、毎年きのこが顔をみせてくれますように—。

(特産部 竹内)

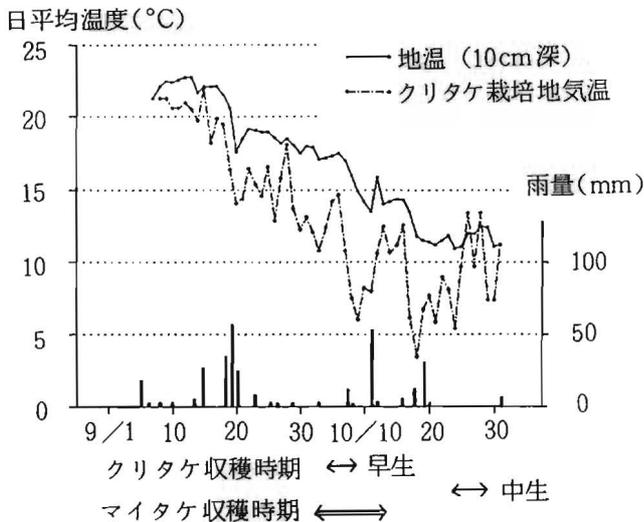


図-1 1989年 (塩尻市片丘)

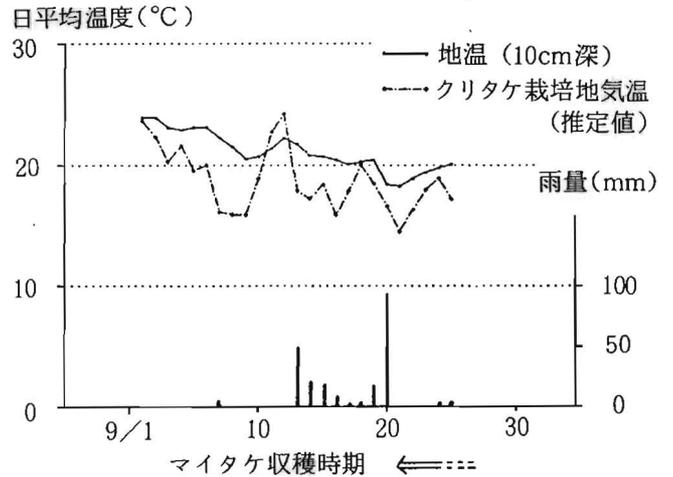


図-2 1990年 (塩尻市片丘)

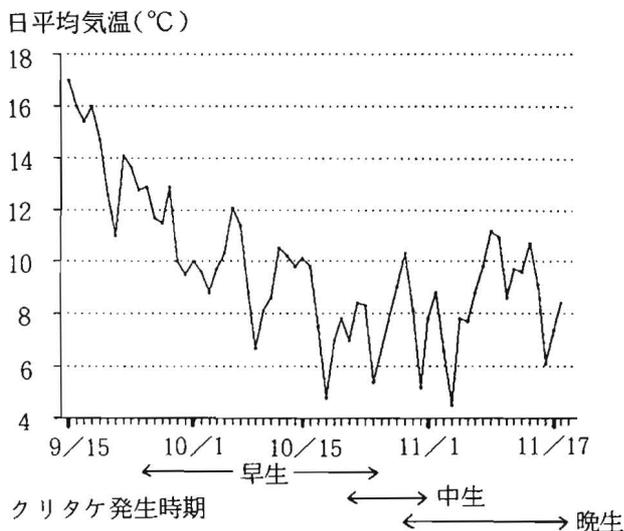


図-3 1989年 (諏訪市湖南)

